

1. 年間目標について

終末期においても施設生活が安心して送れるよう、多職種間との連携・協働体制を深め、必要とされる知識・技術についても共に学習し、最期まで寄り添い支えてきた。また、入居者のみならず、職員の健康管理にも留意し、定期健診は基より、個別の相談などにも対応してきたことから、概ねクリアできたと思われる。

2. 業務計画について

(1) 利用者及び職員の健康管理

<p>■ 健康管理について (入居者)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ➢ 健康診断1回目 令和元年7月27日 39名中37名受診(2名入院加療中)、内、有所見者31名 ➢ 健康診断2回目 令和2年2月8日 39名中37名受診(1名入院中、1名はターミナル期)、内、有所見者数33名 ➢ 要精密検査を指摘され、緊急を要するような検査結果は4ケースあった。後日データを基に医師の診察を受ける。 ➢ 入居者のインフルエンザ罹患者はゼロであった。面会制限は1月末から2月末日までとした。 ➢ 令和2年2月26日には、コロナウイルス感染予防対策として出勤時の手洗い等と西棟からの面会制限を掲げ励行している。
<p>■ 職員の体調管理について</p>	<ul style="list-style-type: none"> ➢ 介護職員の平均年齢も高く、柔軟性と筋力の低下が目立ち、腰痛や神経痛など体調の不良を訴える職員が目立った。適宜、受診や休養などで調整できるよう配慮した。 ➢ 職員のインフルエンザ罹患者は1名であり、同居する家族に感染者がいても、これまでの知識を活かしたことで感染せずに済んだというケースが2例あった。 ➢ 腰痛対策については、予防法と介護技術の修得及び、福祉用具の購入(個人購入も含め)、腰部にかかる負担軽減に努めた。
<p>■ 健康診断について (職員)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ➢ 今年度より全職員に対してストレスチェックを導入。結果については産業医であるいいたてクリニックのDr.管理となっている。個別の面談希望者は現在ゼロである。 ➢ 検診率100%(年2回) 施設外での健診を受けた職員については結果の写しを医務室管理とした。 ➢ 職員の数名については何らかの慢性疾患があり、内服薬の処方を受けている。他、それぞれ指摘された事項について相談と病院受診の必要性を説き、対応している。 ➢ 腰痛検査については、担当医不在という事態になり、自己申告による問診票をもとに、産業医でもある医師に上申、診断を仰ぐ形となった。 ➢ 体調不良にて入院加療を余儀なくされた職員が数人いたが、いずれも寛解し復職している。
<p>■ 健康教育について</p>	<ul style="list-style-type: none"> ➢ 自身の体調管理については個別に相談を受けるなど、健康に関する関心を高めてもらえるよう努めた。 ➢ 感染症をはじめ、自身の健康管理にも役立つような内容を専門職として職員会議時に周知してきた。 ➢ 感染症委員会には固定した看護師が就き、6月には外部から講師を招き『手洗いの勉強会』を実施。2回に分けての実施であったため殆どの職員が参加できた。

<p>■ 受診について</p>	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 救急車搬送は2件（ともに脳血管疾患）、介護と看護間の連携と情報を共有することで、比較的速やかな対応ができた。（手遅れという状態は避けられた） ➤ 入居者の骨折という事故があった。高齢というだけでもリスクを伴っている。 ➤ 重症度の高いご利用者についても主治医の指示の下、家族への連絡を密にするなど信頼関係を築くことができた。 ➤ 診療については、いたてクリニックから毎週火曜日に回診と定時薬の処方を受けていた。慢性疾患のみならず、臨時薬や点滴の処方もあり、施設内で寛解できたことは何よりであった。
-----------------	---

(2) 褥瘡対策

<p>■ 皮膚トラブルの予防</p>	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 早期発見の重要性を周知する。また、速やかな報告が重度化を防ぐことに繋がることも付け加え指示できた。 ➤ 皮膚トラブルがもたらす2次的疾患の特性については、各家会議に参加することで知識を広めることができた。排泄時の観察の重要性についても共にケアすることで指導できている。 ➤ 皮膚の状態を健やかにするため、ワセリン（プロベト軟膏）セラミド入り乳液である『キュレル』及び皮膚の状態に合わせベビーオイルまたはアズノール軟膏を個別購入し対応した。 ➤ ムートン・ロンボクッションをはじめとする体圧分散用具の導入をしてきたことで終末期に於いても褥瘡はゼロであった。 ➤ 栄養の大事さ、経口摂取がもたらす効果については適宜ケア会議などで話し合い、関心を深めていった。 ➤ 皮下出血しやすい薬を処方されているか否かについて周知し、皮膚に与える影響についても指示できた。個別の薬情については各家にファイルを設置することとした。 ➤ 看護師間で検討し、保護剤や被覆材の選択については互いの情報を共有するにとどまった。次年度は開催される勉強会などに積極的に取り組んでいきたい。
--------------------	--

3) 終末期ケア

<p>■ 看取りについて</p>	<ul style="list-style-type: none"> ➤ 「慣れ親しんだホームで最期を」と希望する入居者や家族が多く、7名の方が自分の居室で永眠され、病院に入院してから亡くなられた方は3名でした。 ➤ 悪性の疾患があり終末期を余儀なくされていても、100歳を迎える前に自宅への外出を可能にできたケースについては、本人だけでなく家族や職員にとってかけがえのない思い出となりました。 ➤ 最期は居室にソファベッドを配置するなどして、家族に泊まっていた。一人で逝かせたくないという職員の思いからでもあった。そして、できるだけ悔いが残らないように配慮することで信頼関係を継続できた。 ➤ 終末期を考慮し、事務・厨房・介護・看護のスタッフ全員で関わることができ、家族との信頼関係は一層良好なものになりました。 ➤ かかりつけ医である病院には、毎週火曜日の定期診療に加え、深夜早朝にもかかわらず対応していただき、最期の確認と家族への説明をして頂きました。 <p>〈付記〉</p> <p>好きなものが食べられること、最期ぐらい好きなお酒が飲めたこと、嫌がることをしないこと。笑う顔や、ちょっとした仕草を喜び合える仲間がいること。それらは、何物にも代え難いものであり、私たちは、もはや単なるお世話係ではないという自負さを持つことができるようになりました。</p>
------------------	--

【入院状況】

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
大町病院	1	1	0	1	0	0	0	0	0	2	2	0	7人
あづま脳外	1	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	3人
鹿島厚生病院	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	2人
延日数	20	10	0	10	0	0	28	11	13	15	15	0	122日

【通院状況】

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
大町病院	2	0	1	1	1	0	0	1	0	1	1	1	9人
小野田病院	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1人
あづま脳神経	1	0	2	0	0	0	0	0	3	2	1	0	9人
川俣済生会	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1人
くまがみ歯科	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	2人
鹿島厚生病院	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0	2人
実日数 計	3	0	3	2	1	0	1	3	3	4	2	2	24人

【回診状況】

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	計
受診者数	55	44	34	33	43	42	54	66	53	53	42	11	530人
看取り	1	1	1	1	0	0	0	0	0	1	2	0	7人